

たったひとりの青い空

海外帰国子女は現代の棄て児か

大沢周子

文藝春秋

たったひとつの青い空

海外帰国子女は現代の棄て児か

大沢周子

文藝春秋

著者略歴

1936年、群馬県前橋市生れ。1976年～1982年、テレビ局特派員の夫、一男二女とともにニューヨークに滞在した。

たったひとつの青い空

——海外帰国子女は現代の棄て児か

昭和六十二年九月十五日 第一刷

定価 一一〇〇円

著者 おおさわ ちか子

発行者 西 永達 夫

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三二三
電話 〇三(二六五)一一二一(代)

印刷 共同印刷
製本 加藤製本

* 万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Chikako Ōsawa 1986

Printed in Japan
ISBN4-16-340850-9

目次

序章 ニューヨーク発005便 5

第一章 見棄てられた子どもたちⅠ タツヤ 9

第二章 見棄てられた子どもたちⅡ アキラ 33

第三章 見棄てられた子どもたちⅢ 麻衣子 63

第四章 眼鏡が涙で曇る日 99

第五章 ニューヨーク日本学校 139

第六章 アメリカの教室 169

第七章 たったひとつの青い空 207

あとがき 227

付録 母親が調べた進学事情 233

たったひとつの青い空

——海外帰国子女は現代の棄て児か

序章

ニューヨーク発
005便

目次

序章 ニューヨーク発 005 便 5

第一章 見棄てられた子どもたちⅠ タツヤ 9

第二章 見棄てられた子どもたちⅡ アキラ 33

第三章 見棄てられた子どもたちⅢ 麻衣子 63

第四章 眼鏡が涙で曇る日 99

第五章 ニューヨーク日本学校 139

第六章 アメリカの教室 169

第七章 たったひとつの青い空 207

あとがき 227

付録 母親が調べた進学事情 233

第一章

見棄てられた子どもたち I

タツヤ

ニューヨーク発005便、ロスアンゼルス発61便、ロンドン発442便、シンガポール発710便。一月中旬、成田空港に着くこれらの日本航空の国際線を「受験号」と呼ぶ。二月、三月に行われる日本の高校の入学試験を受けるために、世界中の国際空港から、十五歳の少女たちが「受験号」に乗り込むからである。以下はニューヨーク・ケネディ空港発005便が成田に着いた直後の子どもたちの声である。

A男 五年前、日本を発つ時から、高校受験の時にぼくが帰ることは決まっていた。家族は全員ニューヨークに残っています。

B子 二年前にニューヨークへ。すぐ日本人学校に編入して、受験勉強ひとすじでした。父も母も妹二人も、まだ三年はニューヨークに。メトロポリタン・ミュージアム？ ブロードウェイミュージカル？ エンパイアステート・ビルディング？ いいえ、いち度も。マンハッタンにも行ったことはありません。

C男 母と二人で帰って来ました。受験で帰る、ということは日本を発つ時から決まっていました。父はケネディ空港で「おれは一人で大丈夫だ」と言っていました。

D男 三年前ニューヨークに着いた時、父は「現地校でしっかり勉強しろよ。ハイスクールもこの国で卒業させてやるから」と言った。ぼくは現地校でがんばった。それが去年の暮、急に「高校はやっぱり日本だ。おまえだけ帰れ」。ケネディを飛び立った時、しまった、父に逆らってで

も残ればよかった、と思った。なぜなら「受験号」の周りの座席はニューヨーク日本学校の修学旅行みたいにワイワイガヤガヤ楽しそうで、自信ありそうで、ほくだけ異分子みたいな気がしたから。

高校受験という「この一戦」に十五の春を賭けて、世界中から帰って来た子どもたち。一人で帰って来た子どもは親戚に出迎えられ、母子で帰って来た組は都内のホテルに、そして四十人ほどの子どもたちは帰国生専門の進学塾が用意したバスに乗って、受験直前合宿のホテルへ、と向かう。時差ボケなどと言ってはいられない。明朝から特訓が始まるのである。

こうして成田空港北ウイングから、受験生たちは、東京近県へと散っていく。

出発便のほうへ回ってみる。昨日まで、三カ月、または一カ月の泊まり込み英会話特訓塾でしごかれた大手商社、銀行、メーカーなどの海外駐在員たちが、高い志と、漠たる不安を胸に、世界各地へ飛び立って行く。

成田空港の北ウイングと南ウイングで繰りひろげられるこうした光景は、海外帰国子女の置かれていた奇妙な状況を象徴的に物語っている。と同時に、彼らの父親の、海外駐在員の立場をも、象徴している現象のような気がしてならない。

私たち一家が六年にわたるニューヨーク暮らしを終えて帰国したのは、一九八二年春のことである。夫はテレビ局の特派員。日本を離れた時、十二歳（長女）、九歳（次女）、六歳（長男）だった三人の子どもは、それぞれ十七歳、十五歳、十一歳になっていた。

英語に対してまったく白紙だった三人の子どもは、それぞれ大変な苦勞の末（このことは後に詳しく記す）英語の壁を乗り越えたが、母国日本で、子どもたちの前に立ち塞がったのは言語の壁ではなかった。三人の子どもは日本語は通じたのである。それでもつづては飛んで来た。特に十一歳の息子は、人の子として立っている足もとを根こぎにされるような経験が続けざまに味わうことになる。

息子は近くの小学校の六年に編入した。

「ただいま」といつて帰ってくる声の調子で学校でのその日一日の状態はわかる。しょんぼりした様子もないし、姉二人にあたりちらすこともない。初めての日本の学校で、とまどうことは限りなくあるにちがいないが、親の私が案じるほど息子本人が緊張していないのが何よりだと思った。

「石田君」という名前が、息子の口から、たびたび出てくるようになった。息子はクラスでいちばん背が高く、教室のうしろの席に座っていたが、隣の席が「石田君」だった。学校から帰った息子が、画用紙を買いに行くという。自転車に乗った石田君が迎えに来て、息子もニューヨークから運んで来たオレンジ色の自転車にとび乗って、さっそうと出て行った。仲のよい友だちが

私たち一家が六年にわたるニューヨーク暮しを終えて帰国したのは、一九八二年春のことである。夫はテレビ局の特派員。日本を離れた時、十二歳（長女）、九歳（次女）、六歳（長男）だった三人の子どもは、それぞれ十七歳、十五歳、十一歳になっていた。

英語に対してまったく白紙だった三人の子どもは、それぞれ大変な苦勞の末（このことは後に詳しく記す）英語の壁を乗り越えたが、母国日本で、子どもたちの前に立ち塞がったのは言語の壁ではなかった。三人の子どもは日本語は通じたのである。それでもつづては飛んで来た。特に十一歳の息子は、人の子として立っている足もとを根こぎにされるような経験が続けざまに味わうことになる。

息子は近くの小学校の六年に編入した。

「ただいま」といつて帰ってくる声の調子で学校でのその日一日の状態はわかる。しょんぼりした様子もないし、姉二人にあたりちらすこともない。初めての日本の学校で、とまどうことは限りなくあるにちがいないが、親の私が案じるほど息子本人が緊張していないのが何よりだと思った。

「石田君」という名前が、息子の口から、たびたび出てくるようになった。息子はクラスでいちばん背が高く、教室のうしろの席に座っていたが、隣の席が「石田君」だった。学校から帰った息子が、画用紙を買いに行くという。自転車に乗った石田君が迎えに来て、息子もニューヨークから運んで来たオレンジ色の自転車にとび乗って、さっそうと出て行った。仲のよい友だちが

できれば、学校は楽しい所になる。すべり出しとしては好調ではないか、と私はほっとした。クラス対抗運動競技会が近づいた。

「リレーの選手になったよ。ニューヨークでサッカーで鍛えたから、ダッシュが効くんだよ。みんなびっくりしてたよ」と報告する。

当日は朝から、校内放送のアナウンスや音楽が周辺の山々にこだました。

「日本ね、しみじみ日本だなあ、と思う。学校の放送が町の中に響くなんて」と長女。百メートル徒競走で、息子は一着になった。

リレーでは、彼は赤組の最終ランナーであった。中間地点を過ぎたところで青いハチ巻きの子を追いついて、赤組は勝った。

次の日、息子はいつになく不機嫌な顔つきで学校から帰って来た。夕食のテーブルでもひと言も口をきかない。何かあった、と直感した。食後も、いつもなら長女と冗談を言い合ってたのかな。テーブルを離れないのに、さっさと立ち上がり、

「和英辞典づくり、きょうはぼく一人でやるから」

そう言っただけで自分の部屋へ引き上げた。和英辞典づくりは、国語、理科、社会の三冊のノートに、教科書に出て来る言葉、主に漢字二字または三字の熟語を書き出して、読みがなをふり、それを和英の辞書で引き、英語の意味を書き込んでいく作業である。日本語の日常会話にはまったく不自由しなかったが、社会科と理科、とりわけ理科の授業の中に出て来る用語がわからないのだっ

た。理科はアメリカの学校で、彼がもつとも得意とする教科だったにもかかわらず、である。

ノートの左側に漢字、まん中に読み、右側に英語を記入していく。発芽、活動、塩酸、酸素、観察、標本、気体、層、養分、発生、伝導、化石、対流……。英語にスイッチすれば、すぐ理解できることだったが、日本語の言葉そのものが難しすぎた。だから息子の場合、学習塾に入れば親はひと安心、というわけにはいかなかった。一人でやるから、ということは、自分一人にしておいてくれ、母親には来てほしくない、ということである。

息子の部屋からは何の物音もしなかった。いつもなら椅子を引く音、カバンを放り出す音、戸を閉める音などが聞こえて来るのだが。「学校で何かあったの」と訊ねたところで、とうてい今夜は答えるような顔ではない、と判断した私は、一日、二日待つてみようと思った。

翌朝、朝食の仕度をしていた私に、息子が言った。

「お母さん、『赤い鼻を持っていました』ってそんなにおかしい?」

「その前後はどんな文章?」

「きのう、国語の時間に『おどろいたことに』を使って短い文を作りなさい、という問題が出たんだ。ぼくは『おどろいたことに、そのおじいさんは赤い鼻を持っていました』って言ったら、みんな笑ったんだ。ニューヨークでオースティン・ストリートの肉屋のおじいさん、赤い鼻を持っていたでしょ。あの人を思い出してセンテンス作ったんだよ。

みんないつまでも笑って、田村先生も笑ってた。『これはおかしいね。正しい文章は?』って